

FRAILITY AND ITS ASSOCIATION WITH COGNITIVE FUNCTION AMONG NON-DEMENTED JAPANESE COMMUNITY- DWELLING OLDER ADULTS

陳, 三妹

<https://doi.org/10.15017/1654630>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	陳 三妹			
論文名	FRAILITY AND ITS ASSOCIATION WITH COGNITIVE FUNCTION AMONG NON-DEMENTED JAPANESE COMMUNITY-DWELLING OLDER ADULTS (日本人地域在住非認知症高齢者におけるフレイルならびにそれと認知機能との関連性)			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	熊谷秋三
	副査	九州大学	准教授	杉山佳生
	副査	久留米大学	講師	米本孝二

論文審査の結果の要旨

本論文は、地域在住の非認知症高齢者におけるフレイルティ(以下、フレイル)ならびにそれと認知機能との関連性を明らかにしたものである。研究1においては、フレイルの有病率の推定を行い、欧米諸国とほぼ同様の有病率であることを報告した。フレイルの判定にあたっては、判定項目の一つである身体活動量に着目し、従来の質問紙法ではなく3軸加速度センサー内蔵の身体活動量計で客観的に評価された身体活動のエネルギー消費量を用いた点が独創的であった。更に、フレイルの関連因子も検討した。これにより、研究間の比較可能性を向上させた点で、同研究分野に大きく貢献をした。その上で、研究2では、認知症を有していない地域在住高齢者において、認知機能の水準に着目して、ミニメンタルステート検査と、モントリオール認知機能検査の2つの認知機能検査とフレイルとの関連を検討した。この研究からは、フレイルが重篤な認知障害よりもむしろ軽微な認知機能低下と有意に関連することが明らかとされた。フレイルと認知機能低下が、前臨床段階で強い関連を見せたことは、これらの身体・精神機能の初期の衰えに共通の生物学的基盤が関連している可能性を示唆するものとして、重要な知見を示したといえる。

よって、本論文は博士(人間環境学)の学位に値するものと認める。